

<特集「アスペクト」>

## イタリア語のアスペクト Aspect in Italian

久保 博  
Hiroshi Kubo

東京外国語大学非常勤講師  
Part-time lecturer, Tokyo University of Foreign Studies

**要旨:** 本稿は、特集「アスペクト」のアンケートに沿って、イタリア語のデータを提供することを目的とする。

**Abstract:** The purpose of the present paper is to give data of aspect in the Italian language, based on the questionnaire of the special topic of this volume.

**キーワード:** アスペクト、イタリア語

**Keywords:** aspect, Italian

### 1. はじめに

伝統的なイタリア語の記述では、「アスペクト」は、動詞に関わる、特に動詞の形態論という文法体系の一部にかかわる問題として扱われるのが一般的であると思われる。イタリア語では、完結相は複合時制（例えば近過去）で、不完了相は単純時制で表されるとされる。さらに、例外的に単純時制の遠過去も完結相を表す。遠過去の場合、アオリストのみを表すため、基本的に近過去と完全に置き換え可能というわけではない。

ただ、多くの言語と同じようにイタリア語でも動詞と絡めてアスペクトを表す副詞や語彙的アスペクトにも多少注意を払わなくてはならない。文で示されている事態がどのような状態にあるかは、文法上のアスペクト、動詞の語彙アスペクト、さらに副詞との兼ね合いでさまる。

今回のアンケート調査は、イタリア語を対象とし、例文の作成にあたっては、イタリア人（1987年生まれ、フリウリーヴェネツィア・ジューリア州ウディネ県出身）のネイティブ話者1名の協力を得た。いくつかの例文については、複数の異なるタイプの文を提示している。

### 2. アンケート回答

(1) トンマーズさんはもう来た。

Tommaso	è	già	arrivato
Tommaso.NAME.NOM	is	already	arrived



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。  
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

この文が意味するところは、二つ。一つ目は、Tommaso は現在までにもう「ついた」ことがあるが、今はもういない。二つ目は、「ついて」まだ「ついた」場所にとどまっている。

(2) トンマーズさんはもう来ている。

(1)と同じ表現でも可能だが、次のように副詞 *già* と *essere* を使って「もうすでにいる」という風に述べて、「来る」という出来事がすでに完了していることを示すこともできる。

Tommaso	è	già	qui
Tommaso.NAME.NOM	is	already	here

(3) トンマーズさんはまだ来っていない。

(3)がまだ出来事が起こっていないことに対して、(4)ではこの発話の時間で起こっていないとともに、それ以降のある時点で起こるということを示唆している。

Tommaso	non	è ancora	arrivato
Tommaso.NAME.NOM	not	is yet	arrived

(4) トンマーズさんはまだ来ない。

Tommaso	non	arriva	ancora
Tommaso.NAME.NOM	not	arrive	yet

(5) トンマーズさんはもう（すぐ）来る。

(5a)の様に時間を表す前置詞句 "fra poco" 「もうすぐ」を *arrivare* の現在形と共に用いることも、(5b)のように副詞 *quasi* 「ほとんど」とともに *arrivare* の近過去を用いて、出来事がほぼ完了しているということも可能である。

a.

Tommaso	arriva	fra	poco.
Tommaso.NAME.NOM	arrives	in	a.little.while

b.

Tommaso	è	quasi	arrivato
Tommaso.NAME.NOM	is	almost	arrived

(6) (あ!) トンマーズさんが来た! [その人が来るのに気づいた場面での発話]

このような場合は、Fillmore (1982: 47)が、*sentential demonstratives* と呼ぶものを用いるのが通常である。人称代名詞に関して、過去分詞で現れる動詞のもともとの主語であるか、直接目的語であるかは動詞によって変わる。*arrivare* の様に移動を表す動詞の場合、主語であると解釈できる。

Ecco	Tommaso	(arrivato!)
here.is	Tommaso.NAME.NOM	(arrived)

(7) 昨日トンマーズさんが来たよ.

Ieri è arrivato Tommaso  
Yesterday is arrived Tommaso.NAME.NOM

(8) 昨日トンマーズさんは来なかったよ.

ここでも, (3), (4)と同じ否定の副詞 non が用いられる.

Ieri Tommaso non è arrivato  
Yesterday Tommaso.NAME.NOM not is arrived

(9) (私は) あのリンゴをもう食べた.

他動詞の場合でも, 基本的に「近過去」がもちいられる.

(Io) ho già mangiato la mela  
(I.NOM) have already eaten the apple.ACC

(10) 私はあのリンゴをまだ食べていない.

a.

Io non ho ancora mangiato la mela.  
I.NOM not have yet eaten the apple.ACC

私はあのリンゴをまだ食べない.

b.

Io non mangio ancora la mela  
I.NOM not eat yet the apple.ACC

(11) あの人は今 (ちょうど) そのリンゴを食べています/食べているところです.

イタリア語のいわゆる「現在進行形」の構文は, stare + ジェルンディオが用いられる.

Adesso lui sta mangiando la mela  
Now he.NOM stay eat.GER the apple.ACC

(12) 窓が開いている.

一般的に結果状態の継続のためには, essere と過去分詞の構文が使われる.

a.

La finestra è aperta  
The window.NOM is opened

窓が開いていた。

b.

La finestra era aperta  
The window.NOM was opened

(13) 私は毎朝新聞を読む／読んでいる。

現在の習慣には、現在形を使う。

a.

Ogni giorno io leggo il giornale  
Every day I.NOM read the newspaper.ACC

b.

\*Ogni giorno io sto leggendo il giornale  
every day I.NOM stay read.GER the newspaper.ACC

例文を現在進行形にすることはできない。しかし、試しに作成した(13d)のように現在進行形でも習慣を表すことができるという。違いは「いまこの期間は」ということが強調されているということだった。インタビューの流れの中で出てきた例で、動詞と頻度の表現が変わってしまっているので詳しいことは分からないので、さらなる調査が必要であろう。

毎週土曜は、ヨガのコースに通っています。

c.

Il sabato (io) seguo un corso di yoga  
Saturday (I.NOM) follow a course of yoga

d.

Il sabato (io) sto seguendo un corso di yoga  
Saturday (I.NOM) stay follow.GER a course of yoga

(14) あなたは（あなたの）お母さんに似ている。

現在における恒常的な性質は現在形を使う。

Tu assomigli a tua madre  
you.NOM look like to your mother

(15) 私はその頃毎日学校に通っていた。

過去における習慣は半過去を使う。

Allora io frequentavo la scuola ogni giorno  
At that moment I.NOM followed the school.ACC every day

(16) 私はローマに行ったことがある。

現在における経験を表すには、近過去を用いるのがふつうである。興味深いのは(16b)の様に「～したことがあるか?」という疑問文にするときは副詞 *mai* が現れる。

a.

Io sono stato a Roma  
I.NOM am been in Rome.NAME

b.

Tu sei mai stato a Roma?  
you.NOM are ever been to Rome.NAME

(17) やっとトンマーズが働き始めた

「乗り物が走り出す」のような表現では、*partire* 「出発した」を用い、語彙的アスペクトの観点から問題があるので、アンケートの一部を変えて他の主語と動詞を使う。

Finalmente, Tommaso ha cominciato a lavorare.  
Finally Tommaso.NAME.NOM has started to work

*cominciare / iniziare* 「はじめる」などの動詞を使わなければ「・・・しはじめた」という意味にはならない。

(18) 昨日彼女はずっと寝ていた。

通常、ある事態が長時間継続している場合は、動詞にもよるが時制に関係なく長く続いたことを表す副詞もしくは副詞句を用いる。

Ieri lei ha dormito tutto il giorno  
Yesterday she.NOM has slept all the day

(19) 私はそれをちょっと食べてみた。

イタリア語では、「食べてみる」という表現を *assaggiare* 「味見する、食べてみる」という動詞を使うのが通常であるので、*lavorare* 「仕事をする」をつかった例文を提示する。一般的に「試しに・・・してみる」という表現では *provare* 「試す」という動詞が用いられる。

(19b)のように、動詞を命令形にすることで、忠告などの「・・・してみなよ」というニュアンスを表すこともできる。

私は試しに働いてみた。

a.

Io ho provato a lavorare  
I.NOM have tried to work

まず働いてから、考えてみなよ。

b.

Lavora prima e pensaci dopo  
work.IMP first and think.it later

(20) あの人はそれ（ら）をみんなに分け与えた.

Lui l' ha condiviso con i ragazzi  
He.NOM it.ACC has shared with the guys

(21) さあ、(私たちは)行くよ！

イタリア語では、動詞の現在形の1人称複数がこのような場合用いられる。ただ、実際に発話されるときは単に「私たちは・・・する」という単なる記述とは違うイントネーションを伴うのが通常である。

Dai, (noi) andiamo!  
Come,on, (we.NOM) go

(22) 地球は太陽の周りを回っている.

恒常的な真理を表すためにイタリア語では、いわゆる「現在形」を用いる。

La terra gira attorno al sole  
The earth.NOM turns around to.the sun.

(23) あの木は今にも倒れそうだ.

イタリア語で、このような状況を表すのに”stare per + 不定詞”の構文を用いるのが通常である。

L'albero sta per cadere  
The tree.NOM stay for fall.down

(24) (私は) あやうく転ぶところだった.

未実現の事態を表現するにも、(23)と同じ構文が用いられる。

(io) stavo per cadere per terra  
(I.NOM) stayed for fall to the ground

(25) 明日客が来るので、パンを買っておく.

イタリア語には日本語の「～ておく」に相当するものはない。

Domani (noi) abbiamo ospiti, (noi) dobbiamo comprare del pane  
Tomorrow (we.NOM) have guests.ACC (we.NOM) should buy some bread.ACC

(26) (私は) 東京に行ったとき、この袋を買った.

東京に行ってそこで袋を買った場合、主節、従属節共に近過去が用いられる。

Quando (io) sono andato a Tokyo, (io) ho comprato questa borsa  
When (I.NOM) am gone to Tokyo.NAME, (I.NOM) have bought this bag.ACC

(27) (私は) 東京に行く前に, この袋を買った.

従属節の出来事が主節の出来事よりも後の場合, 従属節を”prima di” もしくは”prima che”で導入することができる. 従属節の主語と主節の主語が同じ場合, (27a)の様に動詞の不定形を用いるのが一般的である. (27b)の様に”prima che”従属節を導入する場合, 従属節の動詞は接続法に活用される. ここでは, 接続法半過去の例を示す. 主節では, 近過去が用いられている.

a.

Prima di andare a Tokyo, (io) ho comprato questa borsa  
Before of go to Tokyo.NAME, (I.NOM) have bought this bag.ACC

b.

Prima che andassi a Tokyo, (io) ho comprato questa borsa  
Before that go.SBHV,IPFV to Tokyo.NAME, (I.NOM) have bought this bag.ACC

(28) (私は) 彼が市場でこの袋を買ったのを知っていた.

ここでは, 従属節の出来事が主節の時制 (半過去) より前に起こったことを示すために, 大過去が用いられる.

(io) Sapevo che lui aveva comprato questa borsa a Tokyo  
(I.NOM) knew that he had bought this bag.ACC in Tokyo.NAME

#### 参考文献

欧文

Fillmore, Charles J. 1982. “Towards a descriptive framework for spatial deixis”. In Robert Jarvella and Wolfgang Klein (eds.), *Speech, Place and Action*. Chichester: Wiley. pp.31-59

執筆者連絡先 : hiroshi80@tufs.ac.jp

原稿受理 : 2022年1月6日